

劇作家

令嬢を金で買う

徹武武器商人は

by たきあや



真夜中の初対面

(視線……?)

結婚してまだ一ヶ月。

静かな貴族屋敷の奥まった寝室で眠っていたノイエンドルフ子爵家の新婦リーゼロッテは、何者かの視線を感じて薄く目を開けた。

確かに誰かに見られている……。

リーゼロッテは目を擦るとランプの灯が点る暗い室内を見回した。ゆっくりと気配のする方へ首を傾ける。

ベッド脇の椅子に、見知らぬ男が座っている。

部屋の明かりは彼女が眠りについた時より少し明るく調整されていて、その照明に照らされて男の姿が見えた。

くっきりとした目鼻立ち、切れ長のその瞳はどこか猛獣の目を思わせる金色で、短い青灰色の髪からは雫が垂れている。男の形の良い薄い唇が動いて、言葉を発した。

「おや、起きたのかな。ちょうどいい」

男はこちらを見つめながら、低い声で言った。

リーゼロッテはビクリとしたが、恐怖にすくむ心を押し殺す。
「……こんな格好で申し訳ありません。お初にお目にかかります、旦那様」

彼女はおもむろにベッドに半身を起こすと、男を見て言った。

「……俺が夫ということはわかるんだな？」

「ええ、ここは夫婦の寝室だそうですから」

「侵入者かもしれないだろう？」

（いいえ、ありえないわ。この屋敷の警備の嚴重さは普通じゃないもの……）



そうなのだ。この広い屋敷は夜昼たがわず兵士のような体躯の男たちが、一日中警備をしているのだ。

「侵入者が夫婦の寝室で風呂を浴びて、バスローブ姿で現れたということですか？」

確かに男は風呂上がりのようで、真っ白なバスローブを着て髪から雫を滴らせている。男はフンと鼻を鳴らすと、薄い唇の口角を楽しそうに上げて、

「……俺の妻は想像していたより、面白い女のような」

と呟いた。

マイヤーハイム伯爵家令嬢リーゼロッテはあり得ない額の支度金を積まれ、商売を営むこの裕福な子爵家に嫁がされた。

実家の伯爵家が領地で起こった問題に対処するため、多額の借金を抱えてしまったのだ。

そこへ救世主のように現れたのが、エアハルト・ノイエンドルフ子爵だった。

だがさすがに深夜、ベッドの上での初対面となれば、少し怯んでしまうのも無理のないことではないだろうか。

（いずれは顔を合わせることになるとは思っていたけれど、寝込みを襲われるなんてね……）

リーゼロッテは心の中で呟く。

貴族同士の結婚なのだ、はなから夢など抱いていないけれど、『悪徳商人の元へ無理やり金で嫁がされる貴族令嬢』の心情はよくわかった。

（今度そんなお話を書くときにはリアルに書けそうね。あとは『白馬に乗った騎士が令嬢を助ける』という展開が欲しいけれど、それは物語の中だけのことね、現実にはあり得ないわ）

この緊迫した状況でなぜそんなことを思っているのかというと、リーゼロッテはお芝居の物語を書く脚本家だからだ。実家の家計を助けるために始めた仕事だったが、今や皇都で評判の大衆劇場の人気作家だ。そんなことは身上書に書いていないので夫は知らないだろうけど。わたしの縁談を決めた兄に止められたのだ。『貴族令嬢が働いているなぞ、世間体の悪いことは書かなくてよい』つまり、余計なことを書くなと釘を刺された。

夫と告げた男は、さらに言葉をかさねる。

「それでは妻よ、今着ているものを全部脱いでくれ」

「……はい？」

「全部脱いで、裸になるということだ。」

「ええ、聞こえました……けれど、あの……一応初対面、ですよね？」

「ああだが、俺の妻だろう？ たった今、俺を夫と認めたのではないか？」

「そうですが……」

「おまえの実家の伯爵家に、かなりの金を積んだ。その俺を拒否することはできないだろう？」

まるで『お前は金で買ったのだから、俺の言うことを聞け』と言っている？ でもきっと現実にはそうなのだろう。私に拒否権などない。私自身は1金貨たりとも受け取っていないけれど、そんなことは断る理由にはならない。

実家がお金を受け取って、わたし自身も結婚の証書にサインをした。この結婚が正真正銘法律に則ったものだとわかっている。正式な夫婦になったのだから、夫婦生活を拒否することなどできない。

「おまえは俺がどんな商売をしているか、分かっている嫁に來たんだらう？」

「……武器商人、とお聞きしました」

(それを知ったのは、ここへ来た当日だったんだけどね……)

「それなら話が早い。俺は商売上、常に命を狙われる立場にある。どこへ行っても必ず初めて会う相手には、ボディーチェックをしている。それは妻とて例外ではない。それとも、俺のボディーガードを呼んでチェックさせるか？ その場合、少々手荒になるかもしれないが……」

畳み掛けられるように言われてしぶしぶ覚悟を決める。他の人間を呼ばれるよりは、一応『夫』なのだから、裸を見られてもしかたがないかもしれない。

「……わかりました」

リーゼロッテは恐怖と恥辱で心臓の鼓動が激しくなり、誰かそばまで来たらこの鼓動が聞こえてしまうのではと思いながら、おずおずと着ていた薄いモスリンの寝着を脱いだ。下着姿になって、躊躇いながら「あの……し、下着もですか？」とおそろのおそろ尋ねると、平然とした顔で夫がうなずいて言った。

「裸、とはそういうことだ」

下着を取って掛布で隠そうとすると、またもや夫の声が追い打ちをかける。

「こっちに向かって、足を開いて」

「……い、いやです……」

「言う通りにした方が身のためだ」

「何故……そんなことをしなければいけないんですか？」

夫は少し考えたようだったが、こう答えた。

「過去にいたんだ。体の中に麻痺薬を隠していた女が……それから用心しているのだ」

「体の中に麻痺薬ですか……？」

「無論、振り返ちにしたが、用心に越したことはない」

あまりの衝撃的な返答にリーゼロッテは言い返すこともできず、恥ずかしさでカクカクと動きながら掛布をはずすと、そっと足を開いて見せた。

夫が近づいて来る。彼はしゃがみこんでリーゼロッテの膝を掴んでグイッと左右に開いた。

怖くて目を瞑りたい……ダメ、ここはしっかり見届けなければ……恥辱で痺れそうなくらいに血が上った頭を叱責する。

（しっかりするのよリーゼロッテ。どんな怖い経験も頭の中に刻んで文章にするのよ）

夫はおもむろにリーゼロッテの股間を覗き込んでいる。

その金色の瞳は、先ほどよりも熱を帯びている気がする……。

夫は自分の右手の人差し指をパクリと自らの口に入れた。そしてその唾液で濡れた指を、今まで誰も触れたことのないリーゼロッテの股間の中心に挿し込んだのだ。

「ひぁっ！……」

思わず声が漏れてしまって口元をおさえる。恐怖と混乱で腰が引けたままで身動きができない。夫の指はわたしのナカをぐりと探るように動いて引き抜かれた。わたしは涙目になって全身を硬直させる。体が震え、頭の中が真っ白になった。

「感じやすい体だな。さっそく俺が欲しいのか？」

夫の口から何故そんな軽口が出るのか、わけがわからない。

（俺が欲しいって、どういう意味よ！）

何も言い返すこともできずに真っ赤な顔のまま硬直していると、すぐに夫の大きな体が覆い被さって来る。身を振って逃れようと抵抗してみるが、のしかかられて逃げることもできない。

「長いこと待たせたな。さっそく初夜とやらを済ませるか」
そんな夫の声が、なんだかさっきより嬉しそうなのは気のせいだろうか。

(わたしの反応を見て、楽しんでる?)

金色の目に籠った熱量が増している。見つめられているところが恥ずかしさで熱くなりそうだ。

「そんな、急に……」 そう言いかけると、
「おっと、忘れていた。口を開けてくれ」と顎を軽く抑えられる。

「なんで……」

と反論しようとした口に、また彼の指が無理やり数本入って来て口の中を探られる。

「口の中も、いろいろ隠すことができるからな……よし」